

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（計画段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
<p>校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践することにより、自分の頭で考え、人と協働し、新たな価値を創造する人を育成する。そのために、</p> <p>① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。</p> <p>② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。</p> <p>③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。</p> <p>④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。</p>	<p>◇ 新型コロナウイルス感染拡大を受け、授業における活動に制約がある中、指導方法を工夫しながら生徒の学びの保障と健康・安全の確保の両立をはかり、家庭と学校の共通理解のもと全校体制で取り組んだ。</p> <p>◇ 探究活動やグループワークの推進、委員会活動、担任・教科担当等による面談等を行い、生徒一人ひとりの意欲を高め、活動に主体的に参加する工夫を重ねた。</p> <p>◇ 附属中学校全学年及び高校1年生1クラスに一人一台のタブレットを持たせ、ICTの環境整備、教員研修、授業での活用を重ねた。学力の向上、データ分析、教職員間の情報共有等の視点で実践研究をさらに進めていく。</p> <p>◇ 高校3年生でスパートゼミを導入し、生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たす工夫をした。今後も主体的・自立的に学習し、挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る。</p> <p>◇ コロナ禍により文化祭や体育祭等の学校行事、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒が主体性を発揮できる活動について実施ができなかった。今後も可能な実施方法について検討を進める必要がある。</p> <p>◇ 限られた時間内に質の高い部局活動ができるよう計画、指導にあたり、生徒の満足度が高まった。全国大会や近畿大会出場、コンクールでの金賞等の成果を出す部局活動が増加した。</p>	<p>① 学力の3要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）をすべての生徒に身に付けさせるため、ICTを利活用しながら個に応じた学びにつながる研究・実践を行う。</p> <p>② 質の高い授業と難関大学合格に向けたスパートゼミ、その他進路補習等を効果的に組み合わせ希望進路の実現を図る。</p> <p>③ 南陽祭の実施や4つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）の継続を通して、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。</p> <p>④ オーストラリアターム留学の実施に向け、校内外連携のさらなる強化を図り、中高一貫教育の効果的な実施と計画的な準備を進める。</p> <p>⑤ 内外の評価を活用し、生徒一人一人を大切にし、個性や能力を伸ばせるよう、学習者起点による学校の魅力化を図る。</p> <p>⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を継続して進める。</p>

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
教務部	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせるために、各教科が学習内容を研究するための体制を整える。	教員間での情報共有・授業改善に向けて、学期に1回授業見学週間を設定する。 ICTの利活用に関する研修の実施、授業での利用方法の提案等を行う。
	担任・各分掌の運営をサポートし、教育活動・内容の質を高める。	BYODに向けて分掌内での役割を整理し、アプリのインストール等、授業での使用がスムーズに行える体制を整える。 令和4年度入学生からの観点別学習状況の評価について、年間での実施から課題等を教科主任会議を通して整理し、次年度に向けて改善する。
	中高の連携を強化し、中高6年間の一貫教育の在り方を検討する。	中学3年間の取組から、高校1年生への接続をスムーズに行えるよう、中学校会議・中学校教科担当者会議との連携を月に1回行う。
	生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。
中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。		生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制作りを行う。
		個々に応じた効果的な指導を行うとともに、協働的活動を支援する環境を構築する。
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員との連携を迅速に行うとともに情報共有を円滑に行う環境を構築する。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
進路指導部	進学講習や自習室開放を通して主体的な学習者を育成する。	進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、生徒のニーズに対応した学習者起点の効果的な進学講座を編成・実践する。
		新型コロナウイルス感染症の状況を適切に判断し、放課後の自習室だけでなく、土曜日の自習室開放など自主自学の学習環境・形態を学校としてサポートする。
		生徒が主体的に学習する際に、ICTを活用できる教育環境づくりを行う。
	難関大学進学に向けた効果的な学習指導・進路指導の充実を図る。	高3生対象のスパートゼミへの取り組みを通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成し、難関大学進学に挑戦する生徒数の増加を目指す。
		各々の学年との連携を密にして効果的な進路学習計画を立案・実施し、進路検討会（第3学年）等で担任の個別面談をサポートし、生徒の希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。
		中高一貫教育の効果的な実施に向け、学習指導・進路指導体制を整える。
各模擬試験データを分析し、活用する。	学級担任・教科担当者が自らFINEシステムやデジタルサービスを活用して学習指導に活かせるように、教員集団としての情報分析力を高める。	
	各模擬試験データを各々の学年と進路指導部の協働体制で分析し、情報を教員間で共有するとともに、部長会や教科主任会で今後の進路指導についての協議・提案を行う。	
保健部	感染症の拡大継続を受け、感染防止に向けての対策、行動変容につなげる取り組みを継続する。	保健委員会発行”Well-being”を通じて生徒目線のメッセージを発信するとともに、保健室だよりやデジタルサイネージを活用して常に最新情報を提供し、感染症や予防対策について生徒に正しく理解させる。
		啓発指導、健康観察、体調不良者への対応等に全校体制で取り組むことができるよう教職員に情報を提供するとともに、感染症予防のための消毒を全校体制で行う。
	特別な支援を要する生徒に、組織的・継続的に対応する。	学年部・担任・教科担当者等と連絡を密にして生徒情報を共有し、学校適応指導会議とも連携を図りながら個々の生徒の支援にあたる。
		外部の関係機関との連携を密にして生徒の実情の把握、理解に努めるとともに、個々に応じた支援を充実させる。
「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	美化委員会発行”美化委員会だより”を通じて生徒目線のメッセージを発信し、美化意識を向上させる。	
	日々の清掃を丁寧に行えるよう清掃備品を整え、美化指導を充実させる。	

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
図書部	図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。	中学生独自の委員会活動を開催し、読書啓発活動を促す。 図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりをする。また、図書委員会だより「F.I.B」を隔月ごとに発行したり、読書月間に「フィブレット」を作成したりすることにより、読書啓発を行う。
	教科担当との連携を深め、授業での図書館利用と、教科内容に関する書籍の生徒への貸し出しを増加させる。	授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。また、教科で作成した作品展示を通して、図書館に足を運ぶ生徒を増やす。 教科と連携をし、教科内容に関わる書籍を読ませる仕掛けづくりを工夫する。
	読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。	新聞や時事問題といった受験時の小論文、英作文に後々関わってくる書籍を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。
		「1 b o x」コーナーなどを活用し、多様なテーマの展示を行う。また、読書活動啓発のために、デジタルサイネージ等のICT機器を活用し、図書に関する情報の効果的な発信方法を模索する。
		団体鑑賞などの学校行事に関連した本の展示や校内ビブリオ大会をきっかけに、普段読書をしていない生徒にも読書を促す機会を増やす。
企画研究部	生徒・教職員の人権意識の深化を図る。	教職員の人権意識の深化を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。 生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を実施・企画する。
	情報発信においてICTの利活用を図り、その効果を検証する。	ホームページやSNS等を利活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施し、その効果を検証する。
		SNS等を利活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施し、その効果を検証する。
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各部と調整しながら事務を進める。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手するとともに、柔軟に施設管理の改善をする。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
第1学年部	高校生としての自立した生活習慣を確立させる。	挨拶を励行させ、清掃活動の徹底を行う。
		多様な集団の中で、他者との違いを認め他者を思いやる姿勢を身に付けさせる。
		学年団と教科担当者が協力しながら、予習・授業・復習のサイクルを身に付けさせる。
	進路実現へ向け幅広い視野を持たせるとともに、挑戦する心を養わせる。	様々な情報発信を行い、幅広い視野と将来の進路への展望を持たせる。
		部活動や国際交流、ボランティアやコンテストへの参加を促し、活動の場を広げさせる。
	情報活用能力やメディアリテラシーを身に着けさせるとともに、デジタルシティズンシップを育む。	主体的にICT機器を活用し、より深い学びへと繋げさせる。
		情報社会で生きていく中で必要な情報モラルやネットマナーの指導を適宜行う。
ICT機器の利用において、他者への影響を考えさせ自律心を育む。		
第2学年部	高校生としての自覚を持ち、自立した行動がとれるように、基本的な生活習慣を身につけさせる。	ルールやマナーの意味を深く理解した上で、規範意識を持って学校生活に臨むよう促す。
		教室や施設をきれいに使用し、協力して良好な学習環境を作り出す意識を持たせる。
	より高い目標に向かって着実かつ主体的に学習する姿勢を身につけさせる。	授業を中心とした学習サイクルを確立し、実践できるように教科担当と学年団が連携を深める。自立した学習者の育成を実践するため、生徒が個々にセルフコントロールしやすい学習環境を与える。
		高い目標を維持していくために、進路指導部と連携し、大きな目的集団の形成を目指す。また、目標に対し、簡単には”依らない・折れない・ぶれない”姿勢を身につけさせる。
	校内行事や校外活動に積極的に参加させ、多様な関わりの中で人間的成長を促す。	研修旅行・文化祭・体育祭・学年行事等に自主的に取り組みせ、どのような状況下でもそれぞれに適応した行事を実行していく姿勢を育む。
様々な集団活動の基本には、人権の尊重があることを日々意識させる。		

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
第3学年部	自立した生活習慣と高い規範意識を確立させ、人間性豊かな生徒を育てる。	挨拶の励行と清掃活動の徹底を促し、ホームルームをはじめとして機会あるごとに、ルールの遵守や他者への思いやりの大切さを説く。 生活や学習のリズムを自己管理できるよう、生活記録表をつけさせる。
	各自に主体的な学びを継続させ、希望進路の実現に向けて全力を傾けさせる。	担任と教科担当者が連携を密にして個々の生徒の状況を適切に把握し、生徒に対しては個人面談をまめに行い、授業を大切にさせるとともに生徒に応じた指導を適切に行う。 進路指導部と連携して、進路への取り組みを充実させるべくタイムリーな情報を提供する。
	さまざまな行事を通して生徒に活躍の場を与え、互いに協力し合っ て目標に向かえる集団を作る。	部活動等への積極的な取り組みを通じて個々の可能性を広げさせるとともに、最高学年として下級生の範となる意識を持たせる。 南陽際などの行事で生徒が主体的に活動できる場をできるだけ多く作り、自己肯定感を高めさせるとともに、互いを尊重し合える集団を作る。
	サイエンス リサーチ科	主体的に探究する意欲を育ませ、科学的な考え方を身につけさせる。
校内外での研究発表を活性化し、本学科の魅力発信に努める。		オンラインツールを利活用した新たなプレゼンテーション(研究成果発表)の在り方を研究するとともに、そのスキル向上を図る。 科学コンテストや発表会への参加を促し、その取り組みをサポートする体制を強化する。
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	自立した学習者の育成を目指し、ICTを活用しながら生徒の主体的な学びにつながる授業研究、授業実践を行う。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	学習活動や学校行事に主体的に取り組ませる中で、仲間意識や人格の成長を図る。 部活動やボランティア活動への参加を促し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。
	教育課程の充実を図るための研究を行う。	中高一貫校としての教育実践、新指導要領を踏まえ、教育課程の編成について研究を行う。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	
国語科	教材や指導法、評価方法を研究することで、授業の質を向上させる。	ICT機器を効果的に活用したり、適切な課題を出したりすることで、生徒自身が主体的に思考・表現することができるような授業を行う。 中学生、高校1年生においては観点別評価を適切に行い、指導と評価の一体化を図ることで生徒の学習の深化を目指す。	
	主体的に学習する姿勢を育て、希望進路の実現及び実社会に対応できる国語力の育成を図る。	予習・復習等の家庭学習や学習内容の振り返りを通じて生徒が主体的に学習する姿勢を育てる。 共通テストや難関大学の入試問題を研究し、スパートゼミや受験指導の際に活用することで生徒の希望進路実現につなげる。 生徒が広い視野や幅広い知識を持てるよう、折に触れて読書を推奨したり図書館を活用したりする。	
	中学生には6年間を見通した指導を行うとともに、新学習指導要領の確実な実施を目指す。	6年間一貫性のある指導を行うため、教科で情報共有を密に行うとともに、中高を問わず、相互に授業見学を行う。 新学習指導要領の実施にあたり、教科内で研修を行い理解を深めるとともに、積極的にその実践に取り組む。また、達成状況を評価し、改善をはかっていく。	
	地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びを実現する。	主体的・対話的で深い学びの実践方法・評価方法について、教科内で共有する。 新学習指導要領での教科指導について、実施内容・評価方法を教科内で検討し、統一した指導を行う。
		中高一貫を見通した指導を行い、附属中学校から高校への円滑な接続を果たす。	新学習指導要領実施も踏まえつつ、中高一貫教育の6年間の指導方針について検討する。 附属中学校でこれまで実施してきた指導を再検討し、指導内容の整理・再検討を行う。
		新学習指導要領や大学新入試を踏まえた授業を行う。	新入試の傾向を各科目担当で分析し、指導内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。 スパートゼミの効果的な活用方法について、教科内で検討・共有する機会を学期ごとに設ける。 ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような質の高い授業を展開する。 希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。 BYODや中学での授業の実践を教科内で共有し、個々の教員がICTをより一層効果的に使えるようにすることで、生徒の学力伸長に繋げる。	
	数学を楽しみ、主体的に探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を教員間で共有し、実践する。 数学検定やその他コンテストへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れたり、普段とは異なる数学の問題へ挑戦したりする機会を増やす。 数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、適宜教科会議で共有し、進捗状況を確認する。 スパートゼミの進捗状況を、教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた指導方法を確立する。 夏期講習や冬期講習の内容に関する議論や振り返りの場を設けることで、より充実した講習ができるようにしていく。	
	理科	個に応じた学習指導を行うことで、生徒に確かな学力を身に付けさせる。	指導と評価の一体化を目指し、新学習指導要領における観点別評価の方法を確立させる。 サイエンスの活動や附属中学校におけるダヴィンチの活動と連携し、個々の理科に対する興味・関心を深め、進路指導に役立てる。 科目主担当を中心にして模擬試験の結果等を分析・検討し、生徒の個々の学力や課題を共有して学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する生徒を育成する。
		新学習指導要領に対応して、ICT活用の充実を図る。	1人1台タブレット端末を効果的に使用するために、教科内で教材共有・実践共有ができるシステムを構築し、実践していく。 事務部をはじめ各分掌や他教科と連携・連動して、効果的にICTを利用していく。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
保健体育科	卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。	自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。
		運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。
		学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた選択制授業を実施していく。
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題をより深く探求する視点を養う。
		現代の新しい健康課題について正しい知識を身につけ、健康的な行動をとることができる態度を養う。
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	中学校との関連を踏まえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。
		鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、自ら表現することができる力を養う。
		グループ発表・学習を行い、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む。	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。
		学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。
		多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める。

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	
英語科	基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒に学力の伸長を実感させる。	<p>学習の仕方を各学年で共通して具体的に指導し、日常的に家庭学習に取り組みせ、学年に応じた自学自習の習慣を身につけさせる。</p> <p>生徒個々のレベルと目標に応じた指導をより効果的にするために、ICTを利活用しながら、個に応じた学習内容を提供し、効果的に個別指導を取り入れる。</p> <p>教科書準拠のオンライン教材活用について研究・実践を進める。</p>	
	英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。	<p>生徒が使える語彙指導の充実を図る。</p> <p>発音指導や音読指導を中心に聞く力を伸ばし、ある程度長さのある英文を意味のかたまりごとに理解し、速読力を伸ばす。(リスニング・リーディング)</p> <p>授業で学習した内容に対して、自分の意見を持たせ、今ある英語力を最大限に生かし、英語で書いたり、話したりする機会を充実させる。(ライティング・スピーキング)</p>	
	家庭科	生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	<p>家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践させる。</p> <p>生活に根付かせる取り組みとして、家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。</p> <p>成人年齢の引き下げを意識した授業内容の充実に努める。</p>
		中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。 ICTの効果的な利活用を行う。	<p>附属中学校一期生の学習の成果と課題をもとに、高校に繋げる家庭科教育の在り方を研究する。</p> <p>ICTの利活用について、効果的な学習指導のための研究を継続し実践を行う。</p> <p>研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。</p>

## 令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を習得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。 将来、必要とされる情報活用能力を習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、SNS、電子メールやスマートフォンやタブレットなどの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。 著作権や肖像権等の日常生活における身近な法規を理解し、情報社会の一員として社会に参画する態度を養う。
	教員の教科指導力を向上させる。	情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。
		ティーム・ティーチングを有効に活用できるよう研究を行い、連携を密にする。